



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

看護研究抄録(2022.4)令和2・3年度:3

旭川医科大学病院における
院内迅速対応システム(Rapid Response System)の活動報告と
課題

旭川医科大学病院における 院内迅速対応システム(Rapid Response System)の活動報告と課題

○酒井周平¹⁾ 上北真理¹⁾ 阿部由希子¹⁾ 黒嶋健起²⁾ 小北直宏²⁾

1) 旭川医科大学病院 ICUナースステーション 2) 集中治療部

【はじめに】

旭川医科大学病院のRapid Response System(以下、RRS)は、試用期間を経て2020年度から本格稼働を開始した。先行研究よりRRSの成果指標は、予期せぬ心停止や死亡、院内総死亡率、ICU予定外入室等とされる。この2年間の活動報告をおこない、今後の取り組みに向けた課題を検討する。

【方法】

診療記録を用いる後ろ向きの観察研究。RRS活動記録や電子カルテより、RRS要請件数や要請基準、依頼者、対応方法、患者基礎データおよび院内の予期せぬ死亡数や病棟急変後のICU緊急入院件数を質的に検討する。

【倫理的配慮】

A大学倫理委員会の承認を得た。開示すべき利益相反はない。

【活動実績】

RRS要請件数は2019年度 19件、2020年度 15件であった。年齢 74.5 ± 13.8 歳、男性17名(50%)。要請基準は「呼吸状態の悪化」が最も多く、次いで「循環動態の不安定さ」、「意識レベルの変化」であった。医師からの依頼が26件(76.4%)で、16件(47%)はICU入院での対応が必要であった。過去3年間の予期せぬ死亡数は13～16件、病棟急変後のICU緊急入院件数は20～30件であった。

【考察】

全国国立大学病院の74%がRRSを導入しており、平日日中のみの施設では年間10～40件であるため、全国平均と大きな隔たりはない。しかし、RRSの成功には1000入院あたり25件以上必要という報告があり当院は4.4件であること、加えて医師からの依頼が大半を占めていることから周知の強化が必要である。そのため、Critical Care Outreach Teamとして各病棟へのRRSラウンドや院内セミナーの開催、病棟別の学習支援の継続が重要である。過去3年間の入院患者を対象としたスタットコールは年間2～4件であり、RRS導入前後において有意差はなかった。同様に、予期せぬ死亡数や急変後のICU緊急入院件数も変わっていない。今後は、RRSの定着と評価指標を検討するためにも医療安全管理部と十分な連携を図る必要がある。

【結語】

当院のRRS活動報告をおこない、院内への周知活動を継続していくこと、また活動の評価基盤の形成に取り組む必要性が示唆された。